

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.29
脳卒中発症

「お父さん。お父さ〜ん。」娘の佳奈が私の身体をゆすり号泣している。「死なないでー。」ここは307号室。担ぎ込まれた救急病院の脳卒中センターの中、集中治療室の一室で意識をなくして横たわっている。高校2年生の佳奈には意識がなくなった状態は危篤状態に等しい。

「お母さん。お父さんは大丈夫よね。」友子は黙って頷き娘の手を握り返した。頬を伝わる涙を拭おうともせず強く娘の手を握り返している。視線ははるか遠くを見つめたまま。1時間前、担当医の崎田はMRI画像を示しながら淡々と語りかけていた。

「右中大脳動脈が閉塞し、広い範囲の脳梗塞です。この白い部分は脳細胞が傷み始めているところです。今から早急に血管に詰まった血の塊を溶かすtPAという薬を開始します。発症から3時間が勝負です。すでに2時間が経過しています。時

間に余裕がありません。この薬の副作用によって血管の傷んでいるところから脳に出血すれば命を落とすことになるでしょう。ただ、何もしなければ、間違いなく健康な状況に回復することはありません。植物状態になることもあります。手足の麻痺も残ります。手をこまねいてただ様子を見ていても何も良くなりません。山部さんに残されているチャンスは後1時間なのです。望みを持って血栓溶解療法を行きましょう。この治療が上手くいけば後遺症なく社会復帰ができるのです。同意書にサインをしてください。」

友子は動転して崎田の説明する内容を理解できないままサインをした。ただ頭の中では『植物状態』という言葉が壊れたレコードのように繰り返していた。(神様、何とか主人の命を助けてください)。娘の手を握り返しながらひたすら願っていた。ゆっくりとしかし確実に時が流れた。

山部聡、52歳。今まで病院とは無縁で検診ではいつも血圧が高いと言われてはいたが、何の症状もなく『自分は健康』と信じてやまなかったごく普通のサラリーマンに予告もなくある日突然訪れた出来事なのです。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村 陽一